

地球に生きる一員として、共感する心を持つ子どもの育成

小 学 校 河 口 麻 衣 子

研究協力者 城戸 茂 (愛媛大学)

1 主題設定の理由

学級・学校や地域で学ぶ子どもたちは、成長や発達とともに、学びの場を広げていく。本プロジェクトでは、国際社会や地球を学びの場とし、子どもたちが将来よりよく生きていくために必要なグローバルな視点や広い視野での考え方の基礎、地球に生きる一員であるという自覚を持ってよりよい世界を築いていこうとする姿勢を育てていきたいと考えている。

将来、地球に生きる一員として多くの人々と共に国際社会を築いていくためには、互いを分かり合い共感する姿勢が不可欠である。共感することで社会の問題を身近な課題として捉え、他者と協同して解決しようとするができるだろう。本プロジェクトで育てたい資質や能力を、「共感する心」として、研究を進めていきたい。

子どもたちが学級や学校という集団の中で培った力をより広い社会で発揮することで、充実感を得たいという欲求を満たしたい。幼児期から育んできた自立心や協同性といった力や、教科等の学びにおいて獲得した知識や技能を、世界という広い学びの場での課題解決に生かしていくことは、「自分はこの課題に挑戦し、うまく解決することができそうだ」という〈自己効力感〉を高めるだろう。〈自己効力感〉の高まりは、主体的な学びの質を高め、主体的によりよく生きようとする自己の生き方を考えることにもつながっていく。子どもの「主体的な学び」や、共同学習者や他者との「対話的な学び」を実現させるためにも、学習の対象や他者の思いに共感する心」を育むことを大切に、本プロジェクトを進めていく。

2 〈自己効力感〉が高まるくすのき学習【地球】プロジェクトの授業づくり

(1) くすのき学習【地球】プロジェクトにおける〈自己効力感〉が高まっている姿

地球に生きる一員としての自覚を持ち、これからの生き方を考えようとしている姿

(2) 〈自己効力感〉が高まる指導と評価

ア 「出会い」の場面

- ・自ら追究したいと思えるような課題意識を持つことのできる教材との出会い
- ・課題解決に向かう意欲や自信や変容を見取る基準とするためのレディネス

本プロジェクトにおける探究的な学習では、学びの場を世界や地球へと広げ、様々な問題から課題を見付けて追究していく。そのため、自ら追究したいと思えるような課題意識をどのように持たせるか、そして、探究的な学習に向かう意欲をいかに継続させるかが大きなポイントとなる。ものやこと、人などを捉える感性や問題意識が揺さぶられて、探究的な学習への取組が主体的で真剣になるためには、子どもの「知りたい」「調べたい」という強い思いが必要である。教材との出会いの場面で、子どもが驚きや疑問を感じたり、自分の意識とのずれや違和感に気付いたりするような手立てを図り、探究に向かう必要感を持たせなければならない。体験活動で実感したことから課題を見付けたり、地域の方やその道の専門家との出会いから自分にとって価値のある課題を設定したり、じっくりと思考する場を設けて日頃感じていた問題を改めて見つめ直したりして、子どもが自分で取り組むべき課題を見いだすことができるような教材との出会いを工夫する。

単元を通しての〈自己効力感〉の高まりを見取るために、単元の始めに子どもの実態調査を行う。「課題を解決するための探究が好きだ」「知りたいことを自分で調べて解決できる」等

の項目に対して、自信度を数値で表し、学習内容に対する「知りたい」という意欲の高さも数値で表すようにして、スタート時点での実態を把握しておく。

イ 「追究」の場面

- ・協働的な学びのための思考ツールの活用
- ・探究活動の過程での自己評価や相互評価
- ・評価のための観察記録の蓄積

共同学習者との学びが対話的になるように、思考ツールを活用したり、教師が話し合いをコーディネートしたりする。収集した情報を整理・分析したり、自分の考えをまとめたりする場面や、共同学習者とのかかわりの中で、自分の思いや考えをうまく伝えたり、互いの考えを出し合ってよりよいものを生み出したりする場面では、適切な思考ツールを選択し、有効に活用する。

また、探究活動の過程において、自己評価や他者評価を効果的に取り入れる。自己評価カードを活用し、毎時の学習を振り返る。子ども自身の本時のめあてとその振り返りを記述と数値で評価する。単元を通して探究に対する意欲を持続し、充実感を獲得することができるように、こまめに評価をし、その結果を子どもに返しながらか〈自己効力感〉の高まりを見取る。小さな課題解決の場面でも自己を振り返り、一つ課題を解決できたことで、次の課題に出合ったとき「自分はこの課題に挑戦し、うまく解決することができそうだ」という〈自己効力感〉の高まりにつながるだろう。共同学習者やゲストティーチャー等との相互評価により、他者に共感したり協力して課題を解決したりできたことを実感することにもつながると考える。

「充実感を得たい」「人とつながりたい」という二つの欲求が満たされているか、資質・能力が身に付いているかという見取りは、教師の観察によるところが大きい。目の前の子どもの様態を観察し、表情や発言、活動の内容から意欲の高まりや充実感の深まりを見取っていく。視点を明確にして、子どもの表情や発言をじっくりと観察するとともに、観察記録を蓄積して変容を見取っていく。子どもの姿や作品、板書などを写真として残し、事後の評価の材料とする。それらを蓄積し、変容を見取っていく。

また、子どもの内面が表出されるようなワークシートや評価カードと、それらを積み重ねたポートフォリオなどの評価材料を活用する。ワークシートの記述から、〈自己効力感〉の高まりを読み取る際には、〈自己効力感〉が高まっている姿が体現されたキーワードを設定し、それらが表出されているかどうかを見取っていく。また、記述に他者を意識した内容や未知のことを知る喜び、多面的な見方や考え方が表れているかということも読み取る。

- (自己効力感)が高まっている姿が体現されたキーワード
- ・気になる ・知りたい ・調べたい ・調べる
 - ・会いたい ・話を聞きたい
 - ・自分と比べて ・自分だったら
 - ・(具体的な方法で) ~する ・分かった ・~できた
 - ・うれしかった ・アドバイスをした、もらった
 - ・一緒に~できた ・次は~したい ・自分だったら
 - ・~できた ・~できるようになった
 - ・うれしかった ・役に立てた
 - ・これから~したい ・これから~する

ウ 「振り返り」の場面

- ・身に付けた資質・能力が発揮される場の設定
- ・学びの成果を具体的に感じられる手立ての工夫

子どもが充実感を得たことを実感するためには、課題を解決できたことや自分が他者のために役立ったことを目に見える形にする必要がある。

身に付けた資質・能力が発揮される場を、教科等の学習やくすのき学習での新たな課題解決に設けるようにする。中学年から高学年へという縦のつながりも大切にし、より難易度の高い課題を解決することで、充実感を深められるようにしたい。

単元の終末では、探究的な学習を通してできるようになったことを考えさせる。身に付けたい資質・能力については、学習を進めながら教師からの働き掛けと子どもとの話し合いによって決定し、子どもに意識させる。この学習を通してどのような力が育つのかを子ども自身が把握し、成長を実感することで、〈自己効力感〉が高まると考える。更に、それらの資質・能力は汎用的なものであり、これからの自分の生き方で生かされる力であるということにも気付かせたい。

評価においては、教師の主観だけでなく、共に学習を進める共同学習者からの評価や、ゲストティーチャー等の探究活動を通してかかわった人からの評価を材料とした多面的な評価も行い、資質・能力が身に付き、発揮されている姿を見取る。また、それらの他者からの評価を子どもに返すことで、充実感や達成感、他者に感謝されることによるやりがいや喜びを味わわせたい。

(3) 教科等横断的な単元の構想

本プロジェクトで設定した課題を追究する探究活動に、各教科等で学習した内容や育まれた力がつながっていく「プロジェクト型」の単元構成を中心に考える。各教科等の学習で学んだことをくすのき学習での探究の過程で生かし、課題を解決することができれば、〈自己効力感〉が高まるだろう。また、くすのき学習で育まれた資質・能力が各教科等の学習で生かされることも期待できる。

くすのき学習を柱とし、教科等との横断的・総合的な学習を進めていく単元を通して、子どもが共同学習者や他者とかかわっていく中で、身に付けた資質・能力を発揮し、充実感を実感することができる方法を探る。社会科の学習における資料を読み取り思考する経験は、探究活動において表やグラフから自分が欲しい情報を得ることで、課題の解決に向かうことができる。また、国語科で学習した説明的な文章の内容が、追究課題と重なることもあり、探究活動に生かすことができる。教科等で学習した内容や育まれた力を探究活動につなげることができ、学びが広がったり深まったりする。

教科等だけでなく、くすのき学習【学級・学校】【地域】プロジェクトでの活動から子どもたちの視野が意識が広がることも考え、くすのき学習の中でのプロジェクト間の横断についても改めて見直し、学びがより深まる効果的な単元を構想したい。